

TOEIC IP オンラインテストの特徴

須田 孝司

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第21巻第1号(2022年9月)抜刷

【論文】**TOEIC IP オンラインテストの特徴**

須田 孝司

1. はじめに

日本では、英語のコミュニケーション能力を測る試験として Test of English for International Communication (TOEIC) の Listening & Reading (LR) が広く利用されている。さらに、学校などの単位で受験できる Institutional Program (IP) の LR (以下、IP テストと呼ぶ) を導入し、そのスコアを単位認定や卒業要件として活用している大学も多い。静岡県立大学でも、2016年度から IP テストのスコアを必修英語科目の単位認定に利用しているが、コロナ禍による大学での対面授業の自粛に伴い、国際関係学部では2020年度から2021年度までの2年間、TOEIC IP オンラインテスト LR (以下、オンラインテストと呼ぶ) を IP テストの代わりとして利用した。本研究では、この急遽導入されたオンラインテストとこれまで利用されていた IP テストのスコアの経年変化を比較し、オンラインテストの特徴を検証する。そして、オンラインテストの特徴を踏まえた試験対策の方法について提案する。

本論文の構成は以下の通りである。第2節では、TOEIC の概要として、テストの種類と内容、採点方法の違いについて説明する。続く第3節では、国際関係学部の TOEIC スコアの経年変化を分析し、IP テストとオンラインテストの違いを探る。第4節では、オンラインテストの特徴をまとめ、その対策方法について提案を行う。

2. TOEIC の概要**2.1. TOEIC の種類**

TOEIC は、アメリカの英語試験開発機関である Educational Testing Service が作成し、日本では一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (The Institute for International Business Communication : IIBC) が運営と実施を行っている英語能力試験の1つである¹。もともとは日本のビジネスマンの英語コミュニケーション力を測る試験であったが、現在では、多くの高等教育機関においてクラス分けや単位認定な

1 TOEIC が作られるようになった経緯については須田 (2017) などを参照のこと。

どに活用されている。

TOEICには、表1のようにいくつか種類があり、大きくIIBCが試験を運営する公開テストと、学校や企業などの団体が自分たちの都合に合わせて随時実施することができる団体テストに分けられる。また、公開テストには公式テストとBridgeテスト、団体テストにはIPテストとBridge IPテストがあり、さらに団体テストにはオンラインテストもある。公式テストとIPテストは、大学生以上を対象としたテストであり、BridgeテストとBridge IPテストは高校生など、英語の初級学習者を対象としたテストである。測定する技能としては、LR以外に、Speaking & WritingとSpeakingがある。

表1 TOEICの種類

	種類	測定する技能	方式
公開	公式テスト	Listening & Reading	マークシート
		Speaking & Writing	パソコン入力
		Speaking	
	Bridgeテスト	Listening & Reading	マークシート
		Speaking & Writing	パソコン入力
団体	IPテスト	Listening & Reading	マークシート
	IPオンラインテスト	Speaking & Writing	パソコン入力
	Bridge IPテスト	Listening & Reading	マークシート
	Bridge IPオンラインテスト	Speaking & Writing	パソコン入力

大学生以上が受験する公式テストは、学校や公共の施設を使い、IIBCが試験の運営を行う。地方により差はあるが、ほぼ毎月1回、年10回程実施される。例えば、2022年度の静岡県内の公式テストの試験会場は静岡市、浜松市、三島・沼津市にある大学などとなっており、静岡市では12月までは毎月、三島・沼津市では2か月ごとに実施される。

IPテストは、IIBCから送られてくる資料と問題冊子を使い、各団体の都合に合わせて試験が実施される。IPテストで出題される内容や試験方式は公式テストと同じであるが、公式テストで出題された過去問を利用しているため、企業や大学院入試などでは、IPテストのスコアを正式なものとして認めないこともある。

2.2. IPテストの内容

IPテストは、公式テストと同じマークシート方式の試験であり、表2のように、約45分間のリスニングセクションと75分間のリーディングセクションからなる。リスニングセクションは、Part 1からPart 4まで4パートあり、写真描写に関する問題から説明文の問題まで100問ある。リーディングセクションは、Part 5からPart 7まで3パートあり、リスニングセクションと同じく100問ある。Part 7の文章問題は、1つの

TOEIC IP オンラインテストの特徴

文章を読んで解答する29問と、複数の文章を読んで解答する25問からなる。各セクションの最低点は5点、最高点は495点である。解答終了後のマークシートはIIBCに送られ、採点が行われる。

表2 IPテストの内容

部門	パート	内容	問題数
リスニングセクション (約45分) 5~495点	Part 1	写真描写問題	6問
	Part 2	応答問題	20問
	Part 3	会話問題	39問
	Part 4	説明文問題	30問
リーディングセクション (75分) 5~495点	Part 5	短文穴埋め問題	30問
	Part 6	長文穴埋め問題	16問
	Part 7	文章問題	54問

IPテストも公式テストと同様、約2時間で200問の問題を解くことになるが、TOEICでは正答数(素点)が直接スコアに反映されるわけではない。異なるフォームのテストを受験したとしてもスコアに大きな差が生じないように、いくつかの段階を経たうえで統計的手法(項目応答理論)を用いてスコアが算出される²。

その方法としては、まずIIBCに送られたマークシートからサンプルを抽出し、その正答率を算出する。その際、正答率の著しく低い解答については不適切な問題と判断し、その後の採点から除外する。採点終了後はスコアの同一化を行い、スコア基準のブレを調整する。具体的には、新しい問題の中に過去問を混ぜておき、過去問の正答率をもとに受験者の英語力を推定し、素点の換算表を作っている³。表3は『TOEICテスト新公式問題集 vol.5』の練習テストの換算表である。この換算表も『TOEICテスト新公式問題集 vol.3』や『公式 TOEIC Listening & Reading 問題集 7』とは異なるものになっており、問題のフォームごとに異なる換算表が利用されていることがわかる。

2 https://www.iibc-global.org/toEIC/toEIC_program/philosophy_03_01.html

3 http://www7b.biglobe.ne.jp/~koizumi/TOEIC_Nagasaki_FD.pdf

表3 『TOEIC テスト新公式問題集 vol.5』の練習テスト換算表

リスニング		リーディング	
素点	換算スコア	素点	換算スコア
96-100	485-495	96-100	455-495
91-95	445-495	91-95	410-490
86-90	400-480	86-90	380-465
81-85	360-455	81-85	350-430
76-80	330-425	76-80	315-405
71-75	300-400	71-75	290-385
66-70	265-370	66-70	260-355
61-65	235-340	61-65	235-325
56-60	210-315	56-60	205-300
51-55	185-285	51-55	175-270
46-50	165-260	46-50	155-235
41-45	140-230	41-45	125-205
36-40	115-200	36-40	105-170
31-35	95-165	31-35	85-140
26-30	80-135	26-30	65-115
21-25	65-110	21-25	50-90
16-20	35-90	16-20	40-75
11-15	10-70	11-15	30-55
6-10	5-50	6-10	15-45
1-5	5-35	1-5	5-30
0	5-20	0	5-15

2.3. オンラインテストの内容

オンラインテストは、パソコンとネットワーク環境さえあれば、どこでも受験することができる。IP テストの試験時間は約2時間であったが、オンラインテストはその半分の約1時間で終わる。表4にオンラインテストの内容を示す。

表4 IP オンラインテストの内容

部門	Unit	内容	問題数
リスニングセッション (約25分) 5~495点	1	写真描写問題	3問
		応答問題	4問
		会話問題	9問
		説明文問題	9問
	2	応答問題	5問
		会話問題	9問
リーディングセッション (37分) 5~495点	1	短文穴埋め問題	5問
		長文穴埋め問題	4問
		文章問題	16問
	2	短文穴埋め問題	7問
		長文穴埋め問題	4問
		文章問題	9問

TOEIC IP オンラインテストの特徴

リスニングセクションは Unit 1 (25問) と Unit 2 (20問) からなり、試験時間は約25分である。Unit 1は IP テストと同様、4パートからなっているが、Unit 2では写真描写問題がない。リーディングセクションも Unit 1 (25問) と Unit 2 (20問) からなっており、内容はそれぞれ短文穴埋め問題、長文穴埋め問題、文章問題で、試験時間は37分である。オンラインテストの出題数は IP テストの半分以下の90問であるが、各セクションのスコアは IP テストと同様、最低点が5点、最高点が495点となっている。

オンラインテストでは、各セクションの Unit 1については全ての受験者が同じ問題に取り組むが、Unit 2は Unit 1のスコアにより難易度が調整された問題が出題される Computer Adaptive Test (CAT) となっている。CAT では、あらかじめ項目応答理論により難易度などが定められている問題に解答するため、受験者に与えられる出題内容は Unit 1のスコアにより適宜変わる (中村, 2007)。またオンラインテストでは、CAT により出題と採点がほぼ同時に行われるため、受験者は受験終了後すぐにスコアを確認できる。

2.4. オンラインテストのメリットとデメリット

IP テストでは、学校の教室など、各団体が準備した会場に受験者が集まり、2時間で200問の問題に取り組む。一方、オンラインテストは、自宅など、自分の好きな場所で好きな時間に解答することができ、1時間で90問の問題に取り組む。したがって、オンラインテストでは、受験者の身体的・精神的な負担が大幅に軽減される。しかし、オンラインテストにはいくつかデメリットもある。

まず、1つ目は、1問当たりの得点の比重が重いということである。オンラインテストは IP テストの半分以下の問題数であるにもかかわらず、スコアの最低・最高点は同じである。IP テストでは200問で最高990点になることから単純に1問が5点程度と推測されるが、オンラインテストの場合は問題数が90問になるため、1問当たりの配点は倍程度になり、1問の比重は当然重くなる。また、Unit 1のスコアをもとに Unit 2の問題が変わるため、Unit 1で失敗した場合、難易度や配点の高い Unit 2の問題に解答する機会が与えられず、正答数が多かったとしても最終的なスコアが伸びないということもある。

2つ目のデメリットは、オンラインテストではこれまでのマークシート方式で広く使われていた解き方のテクニックが利用できないということである。IP テストでは写真や出題文にあらかじめ目を通すことができるため、どのような内容が出題されるのか想像しながら問題に取り組むことができるが、オンラインテストではそのような先読みはできない。また、Unit ごとに時間制限があるため、リーディングセクションで自分の解きやすい問題から解くことや、時間配分を調整することが難しくなる。さらに迷った問題があったとしても、最終的に見直しができないこともある。

このように精神的・身体的な負荷が軽減されるオンラインテストであるが、テスト

のやり方に慣れていない場合や判断の遅れなどにより、スコアが大きく変わる可能性がある。

3. IP テストとオンラインテストの比較

3.1. 受験者

国際関係学部の学生は、必修英語の単位認定のため2年後期まで毎学期（計4回）TOEICを受験している。ここでは、表5に示す2年後期までの4回のテストをすべて受験した学生のデータを分析する。

表5 TOEICの受験者数

入学年度	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	4回受験
2016年	192	187	183	166	156
2017年	199	193	180	178	167
2018年	200	196	193	175	172
2019年	210	211	207	193	188
2020年	197	210	188	173	171

国際関係学部の学生は、2016年度から2019年度までIPテストを受験していたが、2020年度からオンラインテストが導入された。したがって、網掛けで示されている2019年度の2年次と2020年度はオンラインテストの受験者数を示している。

3.2. 平均スコア

各学期の平均スコアを表6に示す。

表6 平均スコア (SD)

入学年度	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期
2016年	575.32 (103.93)	606.28 (112.71)	608.65 (112.70)	603.46 (116.04)
2017年	593.62 (111.13)	601.11 (105.83)	619.94 (115.71)	624.91 (106.83)
2018年	569.01 (112.03)	586.69 (112.77)	590.87 (103.32)	593.31 (115.65)
2019年	598.88 (109.13)	616.94 (105.599)	640.05 (108.48)	653.78 (116.95)
2020年	592.66 (122.51)	638.07 (120.1)	633.63 (121.12)	647.69 (130.88)

TOEIC IP オンラインテストの特徴

2016年度から2018年度までの入学生は、IP テストを4回受験しており、2019年度入学生は1年次がIP テスト、2年次がオンラインテストを受験している。2020年度入学生は4回ともオンラインテストである。平均スコアについて2要因の分散分析を行うと、2016年度、2018年度、2020年度では、1年前期のスコアが他の3回のスコアより有意に低く（2016： $F(3, 465) = 16.881, p < .01$ 、2018： $F(3, 513) = 8.128, p < .01$ 、2020： $F(3, 510) = 25.727, p < .01$ ）、2017年度は1年前期と後期、2年前期と後期では差がないが、1年次より2年次のスコアが高いことがわかった（ $F(3, 498) = 14.911, p < .01$ ）。さらに2019年度は2年前期と後期では差がないが、1年前期より1年後期、1年後期より2年前後期というように徐々にスコアが高くなることが明らかになった（ $F(3, 561) = 27.899, p < .01$ ）。

IP テストと網掛けされたオンラインテストの平均スコアを比較するため、表7のようにIP テストとオンラインテストのスコアをまとめる。

表7 IP テストとオンラインテストの比較（入学年度）

	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期
IP テスト	584.69 (2016-2019)	603.02 (2016-2019)	606.28 (2016-2018)	607.17 (2016-2018)
オンライン	592.66 (2020)	638.07 (2020)	636.99 (2019-2020)	650.88 (2019-2020)
差	7.97	35.05	30.71	43.71

IP テストとオンラインテストの受験者数はかなり異なっているため、表7の4回のスコアに対して統計をかけることは適当ではない。ここでは1年次と2年次に分け、各学年の前後期の平均スコアを比べる。

IP テストの1年前期の平均スコアは584.69点、後期は603.02点であり、オンラインテストの平均スコアよりも低くなっている。2要因の分散分析を行うと、テスト間と学期間に有意差があり（テスト間： $F(1, 852) = 5.59, p < .05$ 、学期間： $F(1, 852) = 106.50, p < .01$ ）、さらに交互作用もあることがわかった（ $F(1, 852) = 19.24, p < .01$ ）。単純主効果を検証すると、IP テストもオンラインテストも1年後期の平均スコアが高く、また1年後期はIP テストよりオンラインテストの平均スコアが高いことが明らかになった。つまり、1年次は2回目の受験である後期の平均スコアが高く、また1年後期のオンラインテストの平均スコアはIP テストより有意に高くなっている。

2年次の平均スコアを比較すると、前期も後期もオンラインテストの平均スコアが高いようである。分散分析を行うと、テスト間、学年間、交互作用にそれぞれ有意差

があった(テスト間： $F(1, 852) = 24.38, p < .01$, 学期間： $F(1, 852) = 7.41, p < .01$, 交互作用： $F(1, 852) = 5.73, p < .05$)。交互作用の単純主効果では、前期も後期もオンラインテストの平均スコアが高く、またオンラインテストでは、後期の方が前期より高いことが明らかになった。したがって、IPテストでは2年前期と後期の平均スコアに差はないが、オンラインテストでは後期の平均スコアが高くなることが示された。

1年前期ではIPテストとオンラインテストの平均スコアに差はないが、それ以降はオンラインテストの平均スコアが高くなっている。また、IPテストでは1年後期以降、平均スコアにそれほど大きな変化はないが、オンラインテストでは2年後期でも平均スコアが上昇している。このような変化はリスニングセクション(R)とリーディングセクション(L)のどちらが影響を与えたのであろうか。表8にセクションごとの平均スコアを示す。

表8 セクションの比較 (SD)

	1年前期		1年後期		2年前期		2年後期	
	L	R	L	R	L	R	L	R
IPテスト	321.93 (59.47)	262.77 (62.40)	334.1 (57.46)	268.92 (61.68)	335.49 (62.21)	270.8 (59.91)	338.9 (60.15)	268.26 (64.53)
オンライン	316.02 (72.53)	276.64 (66.90)	351.52 (63.82)	286.55 (71.56)	344.1 (64.3)	292.9 (65.4)	353.2 (64.94)	297.67 (72.39)
差	-5.9	13.87	17.42	17.63	8.61	22.1	14.29	29.41

1年次では、前期のリスニングセクションにおいてオンラインテストよりIPテストの平均スコアが高かったが、後期になると両方のセクションのオンラインテストの平均スコアが高くなっている。3要因の分散分析の結果、テスト間($F(1, 852) = 5.59, p < .05$)、学期間($F(1, 852) = 106.50, p < .01$)、セクション間($F(1, 852) = 952.86, p < .01$)に有意差があり、また3つの要因間にも交互作用があった($F(1, 852) = 13.71, p < .01$)。交互作用における単純主効果では、1年前期のリスニングセクションではテスト間に差はなかったが、それ以外のすべての項目に有意差が見られ、オンラインテストの平均スコアがIPテストより高く、リスニングセクションはリーディングセクションより高く、またどちらのセクションも前期より後期の方が高いことが明らかになった。

2年次のリスニングセクションの平均スコアは1年後期とそれほど大きな差はないが、リーディングセクションの平均スコアはオンラインの方がIPテストより高い。3要因の分散分析の結果、テスト間($F(1, 852) = 24.38, p < .01$)、学期間($F(1, 852) = 7.41, p < .01$)、セクション間($F(1, 852) = 1537.96, p < .01$)に有意差が

TOEIC IP オンラインテストの特徴

あったが、3つの要因間に交互作用はなかった ($F(1, 852) = 0.13, p > .7 ns.$)。テスト間と学期間には交互作用 ($F(1, 852) = 5.73, p < .05$) があり、前後期とも IP テストよりオンラインテストの平均スコアの方が高く、オンラインテストでは前期より後期の平均スコアが高くなることがわかった。またリーディングセクションでは前後期に差はないが、リスニングセクションではテストの種類にかかわらず、後期の平均スコアが前期より高くなることが明らかになった。つまり、オンラインテストの場合、1年次と同様、2年次後期になってもリスニングセクションの得点が伸びるようである。

このようにセクションごとの比較では、1年次も2年次もリスニングセクションにおいて前期より後期の平均スコアが高くなる。1年前期はほとんどの学生が TOEIC を初めて受験することから、1年後期での伸びは、受験に対する慣れの影響が考えられる。2年後期におけるリスニングセクションの平均スコアの上昇もテストへの慣れで説明できるのであろうか。そこで、以下では3年度分のデータを利用し、スコアの経年変化について検証する。

3.3. スコアの経年変化

IP テストとオンラインテストの経年変化を検証するため、オンラインテストを4回受験した2020年度入学生と、IP テストを4回受験した2016年度から2018年度のうち1年前期の平均スコアが2020年度と似通っている2017年度入学生のデータを分析する。さらに、IP テストを1年次に受験し、2年次はオンラインテストを受験した2019年度入学生のデータも分析の対象とし、スコアが高くなった、または低くなった学生の人数はどのように変化したのか、検証を行う。

表9は学期間のスコアが上昇(+), または低下(-)した人数を示している。また表9の数値をもとに、図1にスコアが高くなった、もしくは低くなった人の割合を、図2にスコアが高くなった人と低くなった人の平均値の推移を示す。

表9 学期間のスコアの変化

			1年前期-1年後期	1年後期-2年前期	2年前期-2年後期
2017年度 (167人)	+	人数	82人 (49.1%)	106人 (63.5%)	84人 (50.3%)
		平均値(SD)	57.99 (49.86)	65.38 (53.05)	66.55 (58.01)
		最大値	Max. 300	Max. 190	Max. 220
	-	人数	78人 (46.7%)	63人 (37.7%)	80人 (47.9%)
		平均値(SD)	-44.94 (31.81)	-47.88 (50.04)	-47.5 (34.48)
		最小値	Min. -130	Min. -245	Min. -140
2019年度 (188人)	+	人数	109人 (58%)	111人 (59%)	108人 (57.4%)
		平均値(SD)	66.65 (53.35)	74.53 (55.76)	75.93 (52.45)
		最大値	Max. 265	Max. 300	Max. 245
	-	人数	75人 (39.3%)	72人 (38.3%)	79人 (42%)
		平均値(SD)	-51.6 (35.29)	-53.89 (49.86)	-71.14 (58.09)
		最小値	Min. -130	Min. -340	Min. -235
2020年度 (171人)	+	人数	124人 (72.5%)	88人 (51.5%)	92人 (53.8%)
		平均値(SD)	85.24 (60.12)	49.09 (42.57)	77.45 (61.59)
		最大値	Max. 265	Max. 265	Max. 300
	-	人数	43人 (25.1%)	80人 (46.8%)	75人 (43.9%)
		平均値(SD)	-65.23 (63.31)	-63.5 (46.51)	-62.93 (55.26)
		最小値	Min. -305	Min. -190	Min. -275

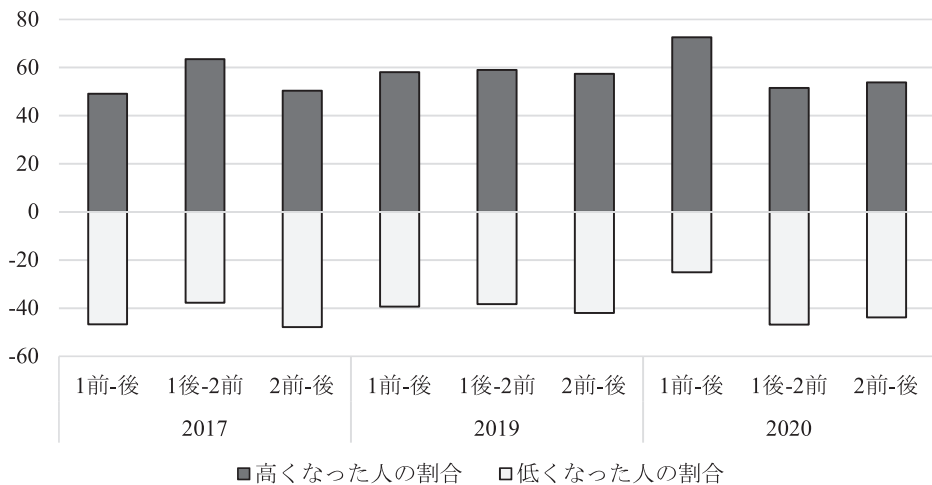


図1 学期間の人数の変化

2017年度は、1年後期から2年前期にかけてスコアが高くなった人が106人と最も多く、低くなった人が63人と最も少なかったが ($\chi^2(2) = 5.926, p < .05$), 2019年度はどの期間もそれほど大きな変化はなかった ($\chi^2(2) = 0.323, ns.$)。2020年度は1年前期から後期にかけてスコアが上昇する人が増え、また1年後期から2年前期の期

TOEIC IP オンラインテストの特徴

間ではスコアの低くなる人が大幅に増えていた ($\chi^2(2) = 19.904, p < .01$)。

テストへの慣れがスコアの上昇と関係があるのであれば、受験回数が多くなるにつれスコアが高くなる、またはスコアが高くなる人数が多くなることが予測されるが、本研究のデータからはそのような予測を支持する結果は得られなかった。表6で示したように、2019年度と2020年度の1年前期から後期の期間にはスコアの上昇が見られたが、2017年度の1年前期と後期や、オンラインテストを初めて受験した2019年度の2年前期と2回目の受験である2年後期の間にもスコアの差はなかった。通常2回目の試験は1回目の試験より得点が高くなる傾向があるが、TOEICでは2回目や3回目のスコアが高くなる人も低くなる人もおり、スコアの上昇はそれほど単純ではない。

表7のIPテストとオンラインテストのスコアの比較では、オンラインテストのスコアが高くなり、また2019年度の1年後期と2年前期の平均スコアには有意差があった。そのため、オンラインテストのスコアの方が高くなりやすいと感じられるかもしれないが、2019年度の前期でもスコアが高くなった人が急激に増えたわけではない。スコアが上昇した人の中には1年後期から2年前期にかけて300点スコアが高くなった人がいる一方で、340点スコアが下がった人もおり、オンラインテストではスコアの上昇や低下の幅が大きい。

さらに、TOEICを初めて受験する1年前期のスコアを見ると、オンラインテストを受験した2020年度入学生のスコアが他の年度と比べ特に高いわけでもない。2020年度入学生は、それ以前の入学生と同様紙ベースの問題を解くTOEICのテキストを使っており、問題文の先読みや時間配分を考慮した解答など、授業でのTOEIC対策がオンラインテストに生かすことができなかつたと考えることもできるが、身体的・精神的負荷の低いオンラインテストだからといってスコアが高くなりやすいわけではない。

次に、スコアが上昇した人と低下した人の平均値の推移を見ていこう。

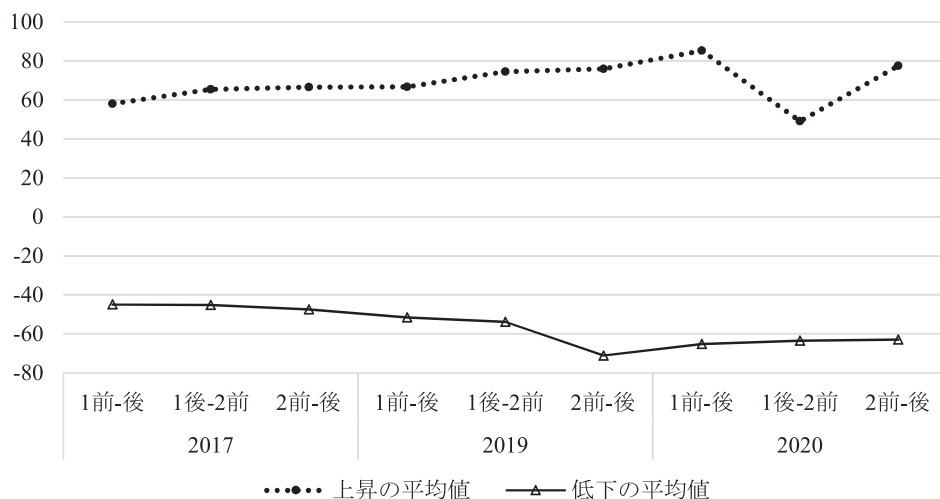


図2 上昇と低下の平均値の推移

年度ごとの平均値の推移では、まず2017年度は上昇平均値も低下平均値も学期間による変化がないことがわかった（上昇： $F(2, 269) = 0.625, p > .5 ns.$ 、低下： $F(2, 218) = 0.105, p > .9 ns.$ ）。また2019年度では上昇平均値に差はないが（ $F(2, 325) = 0.929, p > .5 ns.$ ）、低下平均値では2年前後期が他の期間と比べ有意に低くなっていることが明らかになった（ $F(2, 223) = 3.654, p < .05$ ）。2020年度では低下の平均値に差はなかったが（ $F(2, 195) = 0.025, p > .9 ns.$ ）、上昇平均値は増減を繰り返しており、1年後期から2年前期の平均値が他の期間より下がっていることが確認された（ $F(2, 301) = 11.107, p < .01$ ）。2020年度は、表6の平均スコアの標準偏差を見ても受験者のスコアにばらつきが大きいことから、オンラインテストでは、得点の変動が激しくなる傾向があると思われる。

平均値のばらつきが大きい理由は、一部の人が前回より高得点を取った、または著しく低い点を取ったということを意味している。オンラインテストでは、Unit 1の成績によりUnit 2の出題内容が異なるだけでなく、1問に対する配点も変わる。したがって、前回のテストではUnit 1の得点が思うように伸びず、1問の配点が高いUnit 2の難問を解答する機会が与えられなかった受験者が、今回のテストではUnit 1で高得点を取り、Unit 2の配点の高い問題に解答することができたため、前回よりかなり高いスコアになった可能性や、前回のテストではUnit 1の得点が高く、最終的なスコアも高かったが、今回はUnit 1の得点が伸びなかったため、結果として前回のスコアより大幅に低いスコアを取った受験者がいる可能性がある。このようにオンラインテストではスコアの増減が生じやすい。

TOEIC IP オンラインテストの特徴

スコアの変動幅についてさらに検証するため、前回のテストが500点以下、550-650点、700点以上の3つのスコアグループに分け、前回のテストからスコアがどのように変化したのか、グループごとにスコアが変化した人の割合を比較する。

1年前期のスコアをもとに、1年後期のスコアが上昇、または低下した学生数を表10に示す。

表10 1年前期と後期の比較

1年前期	1年後期との得点差	2017 (167名)	2019 (188名)	2020 (171名)
500点以下 2017: 30名 2019: 32名 2020: 40名	+100以上	5(3.0%)▼	14(7.5%)	22(12.9%)△
	+50以上	12(7.2%)△	8(4.3%)	6(3.5%)▼
	-50以下	1(0.6%)	2(1.1%)	1(0.6%)
	-100以下	0(0.0%)	1(0.5%)	0(0.0%)
	増減の平均値	+61点	+80点	+94点
550-650点 2017: 63名 2019: 68名 2020: 60名	+100以上	4(2.4%)	3(1.6%)	13(7.6%)△
	+50以上	10(6.0%)	10(5.3%)	13(7.6%)
	-50以下	12(7.2%)	10(5.3%)	4(2.3%)▼
	-100以下	2(1.2%)	3(1.6%)	3(1.8%)
	増減の平均値	+0点	+1点	+35点
700点以上 2017: 28名 2019: 29名 2020: 32名	+100以上	0(0.0%)	1(0.5%)	3(1.8%)
	+50以上	1(0.6%)	4(2.1%)	3(1.8%)
	-50以下	9(5.4%)△	7(3.7%)	3(1.8%)▼
	-100以下	0(0.0%)▼	4(2.1%)	5(2.9%)
	増減の平均値	-26点	-18点	-1点

1年前期に500点以下であった学生数は、2017年度30名、2019年度32名、2020年度40名であり、年度間に差はなかった ($\chi^2(2) = 1.647, ns.$)。スコアが変動した学生数を見ると、2017年度に50点以上上昇した学生と2020年度に100点以上上昇した学生が多く、2017年度に100点以上上昇した学生と2020年度に50点以上上昇した学生がすくないことがわかった ($\chi^2(6) = 13.577, p < .05$)。スコアの増減の平均値はどの年度も60点を超えており、1年前期に思うような結果が得られなかった学生が後期にはスコアを伸ばすことができたと考えられる。特にオンラインテストを受験した2020年度は94点も増えており、スコアの上昇が著しいことがわかる。

550-650点の学生数は各年度60人以上おり、年度間の人数に差はなかった ($\chi^2(2) = 0.513, ns.$)。このグループでは、どの年度も50点以上上昇した学生が10名以上いたが、統計の結果、2020年度に100点以上上昇している学生数が多く、50点以上低下している学生数が少ないことが明らかになった ($\chi^2(6) = 12.31, p < .05$)。2020年度は100点以上上昇した学生数が多いため、増減の平均値も他の年度より高くなっている。2017年度と2019年度は、スコアが上昇した学生もいたが、50点以上低くなった学

生も10名以上おり、増減の平均値はほとんど変化しない。オンラインテストを受験した2020年度の学生は、1年後期にスコアを大幅に上昇させる学生がいたが、IPテストを受験した2017年度と2019年度では、1年後期にかけてスコアが高くなった学生も低くなった学生もおり、オンラインテストを受験した学生とは異なる傾向を示している。

1年前期に700点以上取得した学生はどの年度も30名程度おり、年度間の人数に差はなかった ($\chi^2(2) = 0.292, ns.$)。IPテストを受験した2017年度と2019年度には50点以上スコアを下げた学生がいるが、統計の結果、2017年度は50点以上スコアを下げた学生数が多く、2020年度はスコアを下げた学生数が少ないことが示された ($\chi^2(6) = 13.002, p < .05$)。2017年度の増減の平均値がマイナスの方に大きくなっているのは、このスコアを下げた学生数が影響したものと思われる。IPテストを受験した2017年度と2019年度の学生は、1年前期に高得点を取ったとしても1年後期では多少スコアを下げるようである。

表 11 1年後期と2年前期の比較

1年後期	2年前期との得点差	2017 (167名)	2019 (188名)	2020 (171名)
500点以下 2017: 29名 2019: 24名 2020: 21名	+100以上	5(3.0%)	12(6.4%)	4(2.3%)
	+50以上	8(4.8%)	4(2.1%)	4(2.3%)
	-50以下	1(0.6%)	2(1.1%)	2(1.2%)
	-100以下	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
	増減の平均値	+46点	+74点	+42点
550-650点 2017: 53名 2019: 86名 2020: 65名	+100以上	5(3.0%)	10(5.3%)	3(1.8%)
	+50以上	10(6.0%)	20(10.6%)	9(5.3%)
	-50以下	6(3.6%)	16(8.5%)	16(9.4%)
	-100以下	1(0.6%)	3(1.6%)	5(2.9%)
	増減の平均値	+16点	+11点	-9点
700点以上 2017: 28名 2019: 37名 2020: 56名	+100以上	2(1.2%)	0(0.0%)	2(1.2%)
	+50以上	3(1.8%)	4(2.1%)	6(3.5%)
	-50以下	3(1.8%)	5(2.7%)	9(5.3%)
	-100以下	1(0.6%)	3(1.6%)	11(6.4)
	増減の平均値	+8点	-12点	-24点

表11の1年後期と2年前期の比較では、1年後期のスコアが500点以下であった学生数は、2020年度では1年前期の約半分の21名になっているが、年度間の人数に差はなかった ($\chi^2(2) = 1.324, ns.$)。またスコアが変動した学生数を見ると、2年次からオンラインテストを受験している2019年度のみ100点以上上昇した学生が10名以上いるが、統計では人数に差がないことが明らかになった ($\chi^2(4) = 5.131, ns.$)。しかし、2019年度は増減の平均値が74点もあり、100点以上上昇した学生のスコアが平均点の上昇を引き起こしていると判断できる。2019年度入学生は2年次になってオン

TOEIC IP オンラインテストの特徴

ラインテストを初めて受験しており、この2年前期のスコアの上昇は、IPテストからオンラインテストへテスト形式が変更したことが影響を与えていると考えられる。

550-650点のグループでは、2019年度の学生数が大幅に増えている ($\chi^2(2) = 8.206, p < .05$)。2019年度の学生は、スコアが上昇した人数が多いだけでなく、50点以上スコアを下げた学生も10人以上いるため、統計では人数の有意差は示されなかった ($\chi^2(6) = 7.778, ns.$)。スコアの増減は500点以下のグループより少ないが、これはスコアが上昇した学生だけでなく、スコアが下がった学生がいるためである。特にオンラインテストを受験した2019年度と2020年度では、スコアの上昇と下降幅が広がる傾向がある。

700点以上のグループでは、2020年度の学生が56名おり、他の年度より多い ($\chi^2(2) = 10.132, p < .01$)。スコアが変動した人数では統計的な差はなかったが ($\chi^2(6) = 5.991, ns.$)、2020年度は50点以上下がった学生と100点以上下がった学生が多く、増減の平均値も下がっている。

表12 2年前期と後期の比較

2年前期	2年後期との得点差	2017 (167名)	2019 (188名)	2020 (171名)
500点以下 2017: 25名 2019: 15名 2020: 21名	+100以上	6(3.6%)	8(4.3%)	7(4.1%)
	+50以上	6(3.6%)	3(1.6%)	4(2.3%)
	-50以下	3(1.8%)	0(0.0%)	2(1.2%)
	-100以下	0(0.0%)	1(0.1%)	2(1.2%)
	増減の平均値	+45点	+86点	+50点
550-650点 2017: 58名 2019: 64名 2020: 55名	+100以上	5(3.0%)	13(6.9%)	10(5.8%)
	+50以上	10(6.0%)	16(8.5%)	13(7.6%)
	-50以下	6(3.6%)	10(5.3%)	6(3.5%)
	-100以下	3(1.8%)	4(2.1%)	2(1.2%)
	増減の平均値	+6点	+26点	+28点
700点以上 2017: 39名 2019: 55名 2020: 43名	+100以上	0(0.0%)	5(2.7%)	1(0.6%)
	+50以上	1(0.6%)	9(4.8%)	4(2.3%)
	-50以下	9(5.4%)△	5(2.7%)▼	10(5.8%)
	-100以下	4(2.4%)	11(5.9%)	4(2.3%)
	増減の平均値	-31点	-16点	-25点

表12の2年前後期の比較では、2年前期のスコアが500点以下の学生はこれまでで最も少なく、特に2019年度の学生の減少が目立つ。しかし、統計では人数に差がないことが示された ($\chi^2(2) = 2.492, ns.$)。100点以上スコアが上昇した学生数もすべての年度で10名以下になっており、学生数の変動に差はなかった ($\chi^2(6) = 5.803, ns.$)。2019年度の2年後期の平均スコアは前期よりかなり上昇しているが、2019年度の500点以下の増減の平均値は+86点になっており、この平均値の増加が平均スコア

の上昇に関連している可能性が高い。2019年度の学生はオンラインテスト2回目であり、1回目のオンラインテストで得点を取れなかった学生が2回目で得点を伸ばしたと思われる。

550-650点では、前回と同様2019年度の学生数が他の年度より比較的多いが、有意差はなかった ($\chi^2(2) = 0.712, ns.$)。今回も2019年度は、50点以上スコアが上昇や低下した学生が10人以上おり、得点の上昇と下降幅が広がっている。また、2017年度と2020年度でも10名以上の学生が50点以上スコアを上昇させ、さらに2020年度は100点以上上昇した学生も10名以上いた。しかし、統計では学生数の変動数に差は示されなかった ($\chi^2(6) = 1.575, ns.$)。2019年度と2020年度ではスコアの変動幅が広がる傾向がある。スコアの上昇(または下降)幅が広がることはオンラインテストの特徴なのかもしれない。

700点以上のグループでは、2019年度の人数が多いが、年度間に人数の差はなかった ($\chi^2(2) = 3.036, ns.$)。スコアが変動した人数では、2017年度では50点以上スコアが下がった学生が多く、2019年度では50点以上下がった学生が少なかった ($\chi^2(6) = 13.71, p < .05$)。550-650点のグループでは、オンラインテストを受験している2019年度と2020年度入学生のスコアの変動が目立つが、700点以上のグループでは、IPテストを受験している2017年度入学生にもスコアの低下が見られた。

4. オンラインテストの特徴と対策

どのような試験にも慣れというものがあり、1回目より2回目の方がスコアが伸びる傾向がある。これはオンラインテストに限らず、IPテストでも同様である。数年にわたり国際関係学部のTOEICスコアを分析してきたが、IPテストの場合は例年1年前期から後期にかけてスコアが伸びるが、2年次になるとその伸びが止まり、2年前期と後期の平均スコアはほとんど同じになる。しかし、今回分析した2020年度のオンラインテストの結果を見ると、1回目の受験から2回目の受験にかけて平均スコアが上昇しただけでなく、2年次になっても平均スコアの上昇が見られた。この上昇の理由を探るために、3つのスコアグループに分け、スコアの継続的な変化を分析した。オンラインテストでは、前回のスコアが伸びなかった500点以下の学生だけでなく、550-650点といった平均スコア前後の学生にもスコアの大幅な上昇が見られた。さらにオンラインテストでは100点以上スコアが高くなる学生数も多く、スコアの増加の幅も大きい。またIPテストでは前回のスコアが700点以上だった場合、それ以上のスコアの上積みは難しいが、オンラインテストでは、そのような高得点を取った場合でもスコアをさらに上昇させることができるようである。つまり、オンラインテストの方が高得点を取る学生が多くなる可能性が考えられる。

スコアの変動の大きさについては、平均スコアに対する標準偏差の値からも言える。

TOEIC IP オンラインテストの特徴

IP テストの標準偏差は103から115であるが、オンラインテストでは108から130となり、平均スコアの前後におけるばらつきが大きい。さらにスコアの経年変化を見ても、オンラインテストの方がスコアの上昇幅と下降幅が大きくなることが確認された。

オンラインテストは、これまでのIPテストの受験の際に用いられていた対策や解答方法などは通用しないが、時間を考慮しながらUnit 1の問題にうまく対処できれば大幅なスコアの上昇が期待できる。オンラインテストでは、リスニングセクションとリーディングセクションのUnit 1が最終的なスコアに大きな影響を与える。各セクションのUnit 1においてスコアを伸ばせなかった場合、Unit 2で正答を増やし高得点につなげるということが難しくなる。したがって、初めてオンラインテストを受験したときは、解答方法などに戸惑い、英語力があるにもかかわらずUnit 1のスコアが低くなり、最終的なスコアが500点以下になってしまうことがある。2回目以降の受験では、テスト方式にも慣れることから、時間切れや未解答の問題を残してしまうというミスもなくすことができるであろう。時間を考慮しながらすべての問題に解答することがスコアの上昇の鍵である。

参考文献

- Educational Testing Service (2008) 『TOEIC 新公式問題集 vol.3』 東京：国際ビジネスコミュニケーション協会.
- Educational Testing Service (2012) 『TOEIC 新公式問題集 vol.5』 東京：国際ビジネスコミュニケーション協会.
- Educational Testing Service (2020) 『公式 TOEIC Listening & Reading 問題集 7』 東京：国際ビジネスコミュニケーション協会.
- 中村洋一 (2007) 『言語テストの基本的な考え方』 東京：英語運用能力評価協会.
- 須田孝司 (2017) 「学生の英語力と効果的な指導に対する提言」 『国際関係・比較文化研究 第16巻 (1)』 pp. 19-29.